

すてきなあなたへ～

今も輝くスター55 (1)

～チャールズ・チャップリン～

映画を語るには真っ先に名が出る偉大なる映画人

喜劇映画の王様として、今もなおその存在を超える者が現れていないチャールズ・チャップリンは、88年の生涯に4度の結婚をしている。最初の妻ミルドレッド・ハリスは13歳も年下の16歳。2人目のリタ・グレイスが19歳下の同じく16歳。3人目のポーレット・ゴダードは22歳だったが、54歳のとき4人目の妻に迎えたウーナ・オニールはなんとまだ18歳であった。そのため、ことにミルドレッドやリタと結婚したときは彼の性的嗜好がいささか異常ではないのかと噂された。

チャップリンが本当に性的にアブノーマルであったかどうかは知るすべもないが、ティーンエイジの少女にことのほか深い愛情を抱く男であったことは確かだ。ミルドレッドもリタも女優志願で、仕事上のつきあいを重ねるうちの、できちゃった結婚が実情。だが結婚してはみたものの、幼な妻との家庭生活がうまくいくわけもなく、破綻をきたしたというのが真相のようだ。

だから、もしチャップリンがその後の「黄金時代」や「モダン・タイムス」といった傑作・秀作で喜劇の天才としての評価を獲得しなかったら、彼はただのロリータ・コンプレックスでしかなかったかもしれない。

芸達者なホームレス少年

1889年4月16日、チャップリンはロンドンで生まれた。両親とも大衆演芸の芸人。チャールズが生まれてまもなく両親は離婚、その後、父の急死や母の病などで異父兄と共に孤児院に入れられたが、母の回復で母子3人の暮らしを取り戻したものの、彼が11歳のとき母が今度は精神病を発症、チャールズは再び孤児院に入れられるのを逃れようと、家出してホームレスの暮らしに。後年の代表作にあげられる「キッド」や「犬の生活」は、この浮浪児時代の経験から生まれたのである。

両親の血を受け継いで小さいときから芸達者だったチャールズ。7歳ですでに少年ばかりのパントマイム劇団に入って家計を助けていたのだが、母が精神病を克服して戻ってきからも数々の一座で芸を磨き続けた。当時イギリスでもトップクラスのフレッド・カーノー劇団に加入を許されたのは17歳のとき。この劇団がアメリカ巡業の旅に出ることになり、そのメンバーに加えられたのは21歳のときであった。

この巡業中、チャールズの舞台を見てその異色のコメディアンぶりに目をつけたのが、マ

ックス・セネットという名のハリウッドの下っ端俳優。このセネットが3年後にはキーストンという映画会社の製作者兼監督になってドタバタ喜劇の名手といわれるほどに成功していて、カーノー劇団2度目のアメリカ巡業のとき、チャールズはセネットに引き抜かれることとなる。

当時はまだ映画が音を持たないサイレントの時代だから、観客を笑わせるのはコメディアンですぐれた演技力が頼り。子供時代からパントマイムで鍛えた彼の實力はここで大きな開花を見せ、山高帽にダブダブのズボンとドタ靴、それにチョビひげという、チャップリンのトレードマークの扮装も、このキーストン映画時代に生まれ、人気急上昇とともにストーリー作りや監督も任されるようになる。

笑いを芸術にまで昇華

その異才ぶりはほかの映画会社からも注目され、セネットと別れてエッサネイ社との契約はキーストン社時代のほぼ10倍。1年後ミュージュアル社との契約はそれをさらに上回り、その次のファースト・ナショナル社との契約はまたまたその上をいく金額となった。このファースト・ナショナル社で彼が作ったのが、いずれも中編の「犬の生活」(18年)と「キッド」(21年)。前者では野良犬が相手、後者では赤ん坊のときに母に捨てられた少年が相手で、ことに後者では、笑わせるだけでなく大いに観客を泣かせ、浮浪者の主人公を通して、貧しくとも懸命に生きる者たちへの温かいまなざしを、ひとつの芸術にまで昇華させていったのである。

このチャップリンが、長編映画としてみごとな完成を見せたのが、ユナイテッド・アーティスツ社時代の「黄金狂時代」(25年)や「街の灯」(31年)。前者はゴールドラッシュのアラスカに現れた浮浪者、後者は盲目の花売り娘に大金持ちの紳士と誤解される浮浪者が主人公。「街の灯」の頃には映画はもう音を持つトーキー時代に移っていたが、チャップリンはあくまでサイレントにこだわった。自分の芸術の特質がパントマイムにあることをよく知っていたからだ。

だから、続く傑作「モダン・タイムス」(36年)でも彼は、伴奏音楽以外に音を使おうとしなかった。けれど時代の波には抗しきれず、「独裁者」(40年)では独裁者ヒンケル(ナチス・ドイツのヒトラーに対する痛烈な風刺)とユダヤ人の床屋の二役を演じて、瓜二つのヒンケルと間違えられステージに立たされた床屋の大演説に、初めてトーキーの効果感動的に生かしてみせる。

彼がトレードマークの扮装を完全に捨て去ったのは続く「殺人狂時代」(47年)。主人公はおしゃれなフランス紳士だが、実は金持ち女ばかりを狙う連続殺人鬼。笑いとサスペンスを巧みにないまぜた作品だったが、最後に逮捕されたこの紳士が法廷で「平和な世では人を殺すと絞首刑になるのに、戦場で100万人殺せば英雄になる——」と皮肉たっぷりに戦争批判をやったのけるシーンが、チャップリンを国外追放に追いやることとなる。

レッドページで最高にマークされる

その頃アメリカはソ連との冷戦の最中。国内にひそむ共産主義者の摘発に躍起で、映画人からも多くの被疑者が出ていた。当局はチャップリンが「モダン・タイムス」でやってのけた機械万能の資本主義に対する風刺や、「殺人狂時代」の名セリフにこめられた、軍需産業で大儲けする資本家たちへの批判が、危険きわまりないものに見えたのである。しかし彼は委員会からの度重なる喚問には絶対に応じず、老いた道化役者と若いバレリーナの愛を描いた「ライムライト」(52年)を大急ぎで完成させると、ロンドンでのプレミアに出席するため、家族を連れ旅立ったのである。その翌日アメリカ法務局は彼のアメリカへの再入国を許可しないと公表、事実上アメリカから追放の身となったのである。

その後一家はスイス・ローザンヌに定住の地を見つけ、4人目の妻ウーナ夫人との間にもうけた8人の子どもたちとともに、平和な老後を送った。その彼が、ハリウッドの映画人たちによってアメリカに迎え入れられたのは20年ぶりの1972年、82歳のときのこと。1972年4月10日に開かれた第44回のアカデミー賞授賞式で彼に特別賞が贈られたのだ。「モダン・タイムス」の主題曲<スマイル>のメロディーが高鳴る中、老若の映画人たちの拍手に迎えられて壇上に立ち、オスカー像とともにトレードマークの山高帽とステッキを贈られたとき、チャップリンの心には再び映画の都ハリウッドへの限りない愛がよみがえっていたはずだ。

それから5年後の1977年12月25日、クリスマスの日には老衰のため安らかな死を迎えた。享年88。ウーナ夫人はこのとき52歳。ノーベル文学賞受賞のユージン・オニールの娘であるウーナは、18歳のときにチャップリンとの結婚を反対され勘当されても、その愛を貫き通したのだ。家族みんなにみとられてあの世へ旅立ったチャップリンの心に、もはや思い残すことは何もなかったことだろう。

<菅沼正子>

映画評論家。静岡県生まれ。著書に「女と男の愛の風景」「スター55」「エンドマークのあとで」。NHKラジオ深夜便で「思い出のスクリーンメロディ」を2002年から2005年まで担当。地域のミニコミ誌「すてきなあなたへ」(佐倉市)の終刊2015年まで「菅沼正子の映画招待席」を執筆。